

# 「市場に本来的な不安定性」とは？ ——マイケル・ペレルマンの所説に寄せて——

折 原 裕

はしがき

第1節 市場の不安定性

第2節 競争の功罪

第3節 不安定性の制御

むすびにかえて

はしがき

近年、わが国では、リストラクチャリングとか、効率の重視とかが、やかましく言われている。それらは、いわゆるバブルの崩壊に端を発するとされる長期不況を克服するために、必要不可欠の要素であると考えられているらしい。

長期不況の克服に、果たしてリストラクチャリングや効率の重視が必要不可欠であるかどうか、ということはここでは問題にしない。また、やや短期に限ってものを言うなら、リストラクチャリングや効率の重視が、雇用を逼迫させ、かえって不況を深刻化させているように見えることも、問題にしないでおこう。

ここで確認しておきたいのは、リストラクチャリングや効率の重視というスローガンには、言うまでもないことながら、従来わが国企業は、リストラクチャリングを怠り、効率を重視してこなかった、という反省が込め

られていることである。わずか10数年以前に、「ジャパン・アズ・ナンバー・ワン」などと言われ、「日本的経営」への自信を深めていた頃とでは、企業家やエコノミストたちの論調に大きなへだたりが見出されるのである。

「日本的経営」への自信にせよ、近年のリストラクチャリング等にせよ、言わばアメリカの方から吹いてくる風になびいている面は否めないところであろう。そうしたアメリカの方から吹いてくる風が、アメリカ自身の経済状況や経済政策と関連していることも容易に推察されうる。

ともあれ、そうしたことどもも、ここでの問題ではない。ここで問題にしてみたいのは、資本主義的な市場の性格をどう見るか、という市場観に関わる問題である。

「日本的経営」に肯定的な論調は、終身雇用制、年功序列型賃銀、企業別組合という、よく言われる3点セットに肯定的だったはずである。したがって、その論調は、市場での競争原理に直接つき従うことよりも、被雇用者のロイヤリティーを尊重することを、推奨していたことになる。

ところが、近年のリストラクチャリングや効率の重視を喧伝する論調では、逆に、被雇用者のロイヤリティーは犠牲にしてよいから、市場での競争原理に直接つき従うべきだと推奨されるのである。

ふたつの論調はいずれも、その推奨する方向が企業経営にとってメリットがあるとする点で、同一平面上に立つものと言ってよい。とは言え、このふたつの論調の間に、深刻な対立があることも事実であろう。

経済学の歴史をひもといてみるなら、こうした対立と、ほぼ相似形の対立が、経済学の発展の大きな動因のひとつとして作用してきたことが見て取れるだろう。

対立の一方の側は、市場は需給を均衡させ、資源を最適に配分するはずだから、市場の運動を放任するべきであり、政府などは市場の運動にむやみに干渉してはならないとした。他方、対立のもう一方の側は、市場の運動を放任すれば、貿易や雇用は無秩序となり、社会不安を増大させるから、

「市場に本来的な不安定性」とは？—マイケル・ペレルマンの所説に寄せて—

市場には適切な管理が必要であるとしたのである。

上述のふたつの論調の対立は、こうした市場観の対立を、企業家的に反映したものともみなしてよいだろう。そして、近年の論調は、対立の前者である放任主義にリードされ、対立の後者である管理主義は、分が悪くなっているわけである。

こうした事情は、日本でもアメリカでも同様と目される。そうした中、最近アメリカで公刊された、マイケル・ペレルマンの『市場に本来的な不安定性——期待、増大する利益、資本主義の崩壊——』<sup>1)</sup>は、放任主義に疑問を投げかけ、管理主義を支持しようとしている点で、注目に値する著作と言ってよい。以下では、この著作を簡単に検討し、件の市場観の問題を考え直す手がかりにしたい。

## 第1節 市場の不安定性

### 1

マイケル・ペレルマンは、『市場に本来的な不安定性』の序文を、次のように書き始めている。「ソビエト連邦の崩壊により、今や資本主義は、その最終的な勝利を誇らしげに宣言している。以前の社会主義国家は、大あわてで市場経済へ転換しようと争っている。」<sup>2)</sup>そしてまた、ペレルマンの目にうつるのは、アメリカで、公的なセクターが供給していたサービスの数々が、市場にゆだねられるようになってきたことである。学校や刑務所、道路や、果ては警察までもが、私有化されようとしているのである。

ペレルマンは、こうした状況を容認できないで、こう言う。「たとえそうであっても、私は、資本主義の勝利が一時的であることを確信している。市場システムがあまりになじみ深いため、また、制度についてのわれわれの記憶があまりにも短いため、われわれは（最初はそれを知っていたとし

ても) 資本主義がまさにその本性により、生まれつきの不安定なシステムであることを、往々にして忘れる。<sup>3)</sup>」ペレルマンによれば、かつてあった資本の束の間の勝利は、引き続く災難を常に伴っていた。彼に言わせるなら、「アダム・スミスの見えざる手のたとえば、市場の諸力のほとんど魔法のごとき現われを示しているのだ。<sup>4)</sup>」

ペレルマンの考えによれば、スミスの後継者たちは、繰り返す不況などによって、市場というものが穏やかなばかりではないことを、学んだはずである。だが、実際には、ここ数十年の間に、学んだことは忘れられてしまったらしい。ペレルマンの見るところ、今日、市場経済にまつわる危険に注意を払っている者は、きわめて少ない。こうして、彼は次のように嘆くことになる。「われわれは軽率にも、規制的なシステム——それは、福祉システムとともに、恐慌の危険を抑制するはずであり、恐慌の影響から社会を守るクッションであるはずだ——の多くを廃止してしまったのである。<sup>5)</sup>」

このように見てくれば、ペレルマンが放任主義と対立し、管理主義の立場に立つことは、もはや明らかであろう。こうして、彼は、著作の目的を次のように定める。「上述のような事情を頭にとめた上で、市場社会内部にある恐慌の原因の分析に取り掛かることにしよう。この著作は、競争の力が、なぜ不安定性や不況を引き起こし勝ちなのか、ということを示すものである。<sup>6)</sup>」

ペレルマンによれば、市場での競争は、通常期待されているように効率的ではない。彼の言ではむしろ、しばしば競争は非効率的である。

とは言え、誤解してはならないのは、ペレルマンが決して、市場での競争を否定しようとしているのではない、ということである。ペレルマンにとっても、市場での競争にメリットはある。ただ、そうしたメリットが生かされるためには、条件が必要なのだ、というのがペレルマンの見地なのである。

ペレルマンの批判によると、経済学は、不安定性の問題からできるだけ目をそらせてきた。その点を示すのが、経済予測というものの性格である。ペレルマンによれば、経済予測は、それ自体意味がないわけではないが、市場経済の不安定性の理解には助けにならない。なぜなら、「経済学者が物事をまずまず正確に予測しうるのは、諸条件が大幅に変化しない限りでのことだから」<sup>7</sup>である。ペレルマンに言わせれば、「それは、のんきな天気予報者が、明日の天気は今日と同じように上々だと予測して、まずまずの仕事をしうるのと同じことである。」<sup>8</sup>だが、それでは困るのだ。ペレルマンの主張では、「私は天気が長期的には不変ではないことを知っている。私が知りたいのは、天気の突然の変化に備えてどのような準備をしたらいいかということである。私が知りたいのは、今日にわか雨が降る可能性の如何なのである。」<sup>9</sup>

そして、科学を標榜する経済学の抽象性も、市場の不安定性の理解を妨げていると、ペレルマンは批判する。ペレルマンによれば、物理学のように科学的でありたいという、経済学者の熱望にもかかわらず、経済学は物理学とは相当へだったところにある。物理学が現象の説明を旨とするのに対して、経済学は、物理学者が驚くほど、理論の数学的なソフィスティケートに傾斜しているのだ。

ペレルマンの述べるところでは、非現実的な合理性の仮定による経済学のモデルは、「所得や利潤を極大化しようと努める、個人や企業の物語を語るものでしかない。この物語の結末は、ほぼ例外なしに、経済的な刺激が必ず安定的な均衡モデル——おそらく、貨幣政策または財政政策の変更というような、いくつかのマイナーな修正を伴う——を導くということである。経済学者たちが最高の声望を与えるのは、彼のモデルが最もソフィスティケートされた数学の技法を用いている、その人である。」<sup>10</sup>

そして、このように経済学者が抽象性へ埋没することによって、現実の生き生きとした把握がおろそかになっているのだとして、ペレルマンは言う。「不幸なことに、抽象的モデル化の結果、ほとんどの経済学者たちは、経済の現実の活動——実業家はどのようにして決定を行なうのか、工場の作業場で仕事がどんなふうに組織されているか、人々を組織への貢献に駆り立てるのは何か、新しいアイデアはいかにして発展するのか——について、ごくわずかししか知らない。／結局のところ、われわれは、経済をダイナミックにするすべてのものを、除去してしまう。その結果、われわれは、われわれ自身をして、不安定性という経済の本性に直面することを、絶望的に不可能にしてしまうのだ。」<sup>11)</sup>

要するに、ペレルマンの経済学への不満は、均衡論的な枠組に拘泥して、実際的な問題である不安定性に目を向けようとしない、という点に尽きると言ってよい。ペレルマンにとって、経済が均衡ないし安定した世界は、「想像の世界」<sup>12)</sup>に過ぎない。

たとえば、価格の変動は通常、経済を均衡へ向かわしめるシグナルと理解されているが、ペレルマンによるなら、価格の変動は、そのようなものに限られない。価格の変動が大き過ぎて、多くがついてゆけなくなる場合もあるのが現実なのだ、というのである。

信用の膨張や、通貨の変動も、ペレルマンが危惧するような、現実的な不安定性を拡大する要因となる。

言うまでもないかも知れないが、循環の問題は、ペレルマンの考える、不安定性の問題に一致しない。循環とはむしろ、「不安定性の中の安定性」<sup>13)</sup>に関わるからである。「循環的なパターンが意味する規則性は、安定性の一形態を示す。私が議論したい不安定性は、循環的な運動を越え出るものだ」<sup>14)</sup>とペレルマンは言うのである。

均衡論的な枠組に対立する見地を示した論者の代表として、ペレルマンは、ジョン・メイナード・ケインズ、ジョセフ・シュムペーター、カール・ポランニーの3人の名をあげている。

まず、ケインズについて、ペレルマンはこう言う。「ケインズの重要な功績は、経済を完全雇用均衡に向かわせる、いかなる経済諸力も存在しないという点に、われわれの注意を引き付けたことである。<sup>15)</sup>」ペレルマンによれば、ケインズの頭を悩ませたのは、不況の不安定性ではなく、不況の困難な安定性にあったから、この意味で、「ケインズは、歓迎できない種類の安定性ではあるけれども、経済の安定性の理論家と分類できる<sup>16)</sup>」ことになる。とは言っても、それは一種の言葉のあやであり、ケインズが均衡論的な枠組の外にあることは、論を待たない。

ペレルマンのケインズに対する不満は、ケインズが不況の原因を説明するのに、心理学を援用するなど、経済外的な説明に依拠した点である。ペレルマンも、経済外的な要因が不安定性を引き起こす可能性は否定しないが、「私が強調するのは、市場に内的な諸力もまた、経済的な不安定性を引き起こすということだ<sup>17)</sup>」として、ケインズと一線を画するのである。

ペレルマンが最もケインズを評価するのは、賃銀の安定性に注目した点である。ペレルマンによれば、「賃銀を安定に保とうとするような、制度、慣習、慣例〔……〕それらが〔……〕劇的な種類の不安定性から経済を守る、慣性的な諸力を創造する<sup>18)</sup>」のだ。やや先取りして言うなら、ペレルマンの著作の眼目は、この「慣性的な諸力」の作用にある。

次に、シュムペーターについては、ペレルマンは、こう言う。「彼は極端な保守主義者であったけれども〔……〕シュムペーターのお気に入りの生徒たちは、マルクス主義者であった。シュムペーターは、マルクスの分析体系を用いて、資本主義がその成功のゆえに、崩壊するであろうことを、

示そうとしたのである。<sup>19)</sup>」

ペレルマンによれば、シュムペーターは、経済学の中心的なヴィジョンを攻撃した。シュムペーターは、ほとんどの経済学者が均衡への運動を想定する場合に、市場の諸力が均衡を破壊し、不安定性を創り出すことを、主張した。「シュムペーターは、経済を破壊するような、大きなイノベーションを促進する、企業家の役割を強調したのだ。<sup>20)</sup>」

したがって、ペレルマンに言わせるなら、「シュムペーターは、保守的な考えをひっくり返した<sup>21)</sup>」ことになる。「不況が資本主義に安定性の享受を許し、[……] ほとんどの経済学者が安定性と結び付ける、繁栄が資本主義の基礎を脅かすのだ。<sup>22)</sup>」ペレルマンの述べるところでは、「シュムペーターは、マルクスが考えたように、資本主義の失敗によってではなく、その成功によって、市場経済は不可避免的に社会主義に道を譲るだろうと、主張したのである。<sup>23)</sup>」

ただし、ペレルマンは、資本主義の崩壊や社会主義への移行という論点を、そのままにシュムペーターと共有するわけではない。ペレルマンがシュムペーターに依拠しつつ、主張するのは、「創造的な破壊は、たとえ経済に有益であっても、コントロールを失なわないように、制御されねばならない<sup>24)</sup>」という点なのである。

最後に、ポランニーについては、ペレルマンは、「経済の安定性に関する深刻な疑問を提起した<sup>25)</sup>」という評価を与えている。ペレルマンによれば、ポランニーが主張したのは、「原始諸社会が、慣習や伝統で社会を秩序付けることによって、経済的な安定性を達成した<sup>26)</sup>」ということである。時を経ると、慣習や伝統が、市場にその力をゆだねるようになり、19世紀になると、社会はその未来を、前例のないほど市場に託すことになる。ペレルマンの言では、「ポランニーが、アダム・スミスの伝説に異議を唱えるのは、この点である。彼が力説したのは、市場は、錨を持たず、にもかかわ

「市場に本来的な不安定性」とは？—マイケル・ペレルマンの所説に寄せて—

らず自らの生存を請け合う、ということだった。人々は、また自然でさえも、市場の命令に、必ず自らを適合させねばなら<sup>27)</sup>なくなるのである。

ペレルマンがポランニーを高く評価するのは、慣習や伝統の再評価という点にだけではなく、自然が市場に服することへの危機感という点にも存することになる。「ポランニーは、市場が残酷な客観性で、いかに人々をむさぼりうるか、それを示すことに骨を折った。この意味で彼は、〔経済学者ではないけれども〕経済学の公式な訓練を受けた経済学者以上に、優れた経済学者である。市場は、社会に対してと同様、自然に対しても、破壊<sup>28)</sup>的なのである。」

ペレルマンの述べるところでは、経済学者は、自然の破壊を軽視する傾向がある。ペレルマンの見るところ、この傾向は、自然の問題を市場の「外部性」として取り扱うことから生ずる。だが、ペレルマンによれば、「実際のところ、これら経済活動の好ましからざる結果は、経済成長の過程<sup>29)</sup>の中心とみなされるべきなのである。」

## 第2節 競争の功罪

### 1

ペレルマンの主張によれば、「ほとんどの経済学者が安定化の影響力を持つと考えている競争の力は、実際には、恐慌を引き起こすという持ち前の傾向<sup>30)</sup>を持っている。」ペレルマンは、競争の力が持つこうした傾向の発現を、「見えざる手の致命的な一撃<sup>31)</sup>」と名付けている。

ペレルマンは、以下のように考える——。経済理論が教えるところによるなら、競争は、商品の価格を限界費用に接近させる。限界費用に一致する価格こそ、効率と公平を実現する価格だと言われている。だが、それは一考を要する問題なのだ。製造業やサービス業でマジョリティーを形成し

ているような企業では、限界費用は非常に小さい。だから、限界費用に価格が一致するなら、企業は、新たに供給する商品の費用を回収できても、商品の開発等に要した、過去の費用を回収できないことになる。

「極端な例として、コンピューター・ソフトウェアを取り上げよう<sup>32)</sup>」と、ペレルマンは言う。この産業では、製品であるプログラムのコピーを追加生産する限界費用は、事実上ゼロである。ということは、企業が限界費用しか得られないとするなら、企業が得るものは、事実上ゼロである。

ペレルマンは、同一のプログラムを生産する、ふたつの企業が競争する場合を想定する。一方の企業は、顧客に500ドルという価格をオファーする。だが、この500ドルという価格が、顧客に受け入れられなければ、もう一方の企業に顧客を奪われないために、たとえば450ドルに価格を下げざるをえない。もう一方の企業も同種の行動を取るなら、価格は、さらに下がって、たとえば400ドルになるだろう。

「どちらの企業も、プログラムの追加コピーを生産する費用としての限界費用を、価格が上回る限りは、たとえ初期の費用の大半が失なわれるとしても、なにがしかを獲得することになる、ということを知っている。／この過程は、規制されない競争過程というものの、過酷な本性を例証する。強い競争の下では、価格は、限界費用に向かって下落するだろう。コンピューター・プログラムを開発するための価格、あるいは、工場や設備の購買費用——経済学者が言う『固定費用』——は、財の限界費用に算入されない。価格は、これら固定費用におかまいなく、限界費用に向かって下落するのだ。企業がついに固定費用をまかなえなくなるなら、企業は確実に破綻するだろう。」<sup>33)</sup>

このようなペレルマンの思考は、明らかに幅がせま過ぎるものである。企業が、理論通りに、実際にも、限界費用まで商品の販売価格を下げると考える必要はないだろう。企業は、実際には、限界費用ではなく、固定費用を含めた、総費用を意識して行動すると考えてよい。もちろん、その場

合でも、過当競争によって商品の販売価格が、総費用を補填できないレベルまで下落する可能性はある。しかし、その場合は、いくつかの企業が撤退することによって、商品の供給が減少し、長期的には価格は総費用を補填できるレベルまで回復するはずである。そうでなければ、長期的には、当該産業は滅び去ってしまうことにならざるをえないからである。

もっとも、だからと言って、ペレルマンが述べていることの全部がナンセンスというわけではない。競争の過程で生ずる価格の下落が、企業の破綻を引き起こしうることは、言うまでもなく、大いにありうることだからである。ただ、理論の側からそうした事態を見た場合、その事態は、理論が予定する、均衡へ向かう傾向を否定するものではない、という点に注意が必要である。理論の側からは、企業を破綻させるような価格の下落は短期の現象に限られ、長期的には経済は均衡に向かうことが主張されるであろう。

ペレルマンは、限界費用と固定費用との関係について、別の角度からの考察も付け加えている。新技術をいち早く導入した企業は、限界費用が大幅に低下するので、新技術の導入費用等の固定費用を商品の価格に転嫁しつつ、超過利潤を獲得しうる場合がありうる。だが、そうした新技術が普及すれば、商品価格が下がり、超過利潤はなくなってしまう。のみならず、工場や設備に投じた固定費用もまかなえなくなるかも知れない。「こうした環境の下で、競争の圧力は、産業に対して、多額の貨幣を投資に充当するよう強制する。企業は、限界費用だけしか得られないから、投資を回収できない。やがて広範な破綻が起こるだろう。」<sup>31</sup>

ここでペレルマンが考えていることも、確かに、事実としてはありうることである。しかし、やはり、理論の側から反論するなら、ペレルマンの考えているような事象は、あくまで短期の事象に過ぎず、依然として、長期的には経済は均衡へ向かう、と主張しうることになる。

要するに、ペレルマンの力説する過度の競争と、それに起因する企業の

破綻等は、彼がチャレンジしている相手である、保守的な経済理論からすれば、理論自体をくつがえすような問題ではないのである。

## 2

ペレルマンの述べるところでは、「自由放任という経済学者の基本理念は、市場というものが、自然の作用に干渉すれば必ず重大な害が生ずるのと同じように、自然的な制度であるという、証明されない命題に依拠している。<sup>35)</sup>」経済学者が重視する市場と、エコロジー運動が重視する自然とは、何だか同じ性格のもののように言われている。だが、ペレルマンによるなら、両者はあまりにもかけ離れている。

自由放任論者もエコロジー運動も、自然の過程は、外部の干渉がなければ、最善の結果に導かれると考えている。だが、自由放任論者のすすめることと、エコロジー運動がすすめることと、ふたつは真っ向から反対する。自由放任論者にとって、自然は利用されるための資源に過ぎない。これに対して、エコロジー運動にとって、自然は不可侵のものであり、人類すらが「歓迎されない自然への侵入者<sup>36)</sup>」であるとみなされるのである。

市場が自然と異なることは、言わば自明なのであるが、ペレルマンは、さらに論を進めて、生物の進化について言及する。

ペレルマンの述べるところでは、旧式で時代遅れの産業を「恐竜」にたとえることが、しばしばある。このたとえによると、恐竜は、いったんは世界を制覇したものの、もっと環境に適応した生物の登場によって、時代遅れにされ、忘れ去られていったのである。だが、ペレルマンの言では、このたとえは、かなり割り引いて受け取らねばならない。恐竜が世界を制覇できたのは、恐竜が当時の環境に最も適応していたからである。それが、どうして滅びなければならなかったのか。

ペレルマンによれば、恐竜が滅びたのは、恐竜の自然環境への適応能力

「市場に本来的な不安定性」とは？—マイケル・ペレルマンの所説に寄せて—

自体のせいではない。科学者の教えるところでは、恐竜の絶滅は、地球規模での環境のカタストロフィーの犠牲として起こった。巨大な小惑星が地球に衝突し、大規模な環境の変化が生ずると、以前は恐竜が繁栄するのに役立った形質が、以後は恐竜の生存に障害となったのである。

環境の大きな変化があれば、確かに、それまでの適者が生存できない場合もあるだろう。ペレルマンは、最近の生物学上の発見として、特定の種類のロブスターの舌に生息する、それまで知られた種とはまったく関連を持たない生物の例をあげている。この生物は、極めて特殊な環境に適応するために、精緻な進化をとげている。しかし、こうした精緻な進化は、環境の変化に概して弱い。この生物が寄生している「特定の種類のロブスターが衰微したり、好ましくない場所に移動すれば、ロブスターの小さな舌<sup>37)</sup>の住人の生存はおびやかされるのだ。」

つまるところ、ペレルマンが言いたいのは、生物の進化を見るなら、適者が生存するとは限らない、ということであろう。もちろん、その背後には、市場においても適者が生存するとは限らない、という理解がある。

### 3

市場においても適者が生存するとは限らない例として、ペレルマンは、アメリカで、自動車の動力としての、スチーム・エンジンがすたれていった歴史をあげている。

ペレルマンの述べるところでは、20世紀の初めは、自動車の動力としては、ガソリン・エンジンよりも、スチーム・エンジンの方が優勢だった。スチーム・エンジンは、燃焼が、間接的なエネルギー源になっているので、効率は劣る。しかし、ギア・ボックスがいないから、要する技術が簡単であり、技術者が不足し、燃料は安いという、当時のアメリカの経済事情にも合致していた。だから、その頃は、スチーム・エンジンが、ガソリ

ン・エンジンを駆逐するだろうと、想像されていた。ところが、実際は逆に、ガソリン・エンジンがスチーム・エンジンを駆逐したのである。

なぜ、そういう結果になったのかと言えば、スチーム・エンジンは、小規模の製造業者によって作られており、こうした小規模製造業者の技術は、当時の急速な技術革新に、適合的でなかったからだ、という。

つまり、ペレルマンのあげている例は、純経済的には、ベストの適者であるはずの、スチーム・エンジンが、純経済的ではない理由によって、生存できなかったことを表現しているわけである。

また、ペレルマンは、もう少し話の先を絞って、フォードが凋落し、ゼネラル・モーターズが台頭してくる過程も、適者が生存できるとは限らない例として、あげている。ペレルマンの言では、フォードが後退したのは、ゼネラル・モーターズの方が、自動車のスタイルを豊富に用意したからである。消費者の好みの変化によって、適応の条件が変化したことになる。

ペレルマンは、そうした例に、次のような言葉を付け加えている。「皮肉なことに、もっと後になると、ゼネラル・モーターズは、日本の企業にかなりの利益を奪われることになるが、日本の企業は、製品の選択枝をいくぶんせばめることによって、製品を安くしていたのだ<sup>38)</sup>」これも、消費者の好みの変化を反映した、適応条件の変化と言ってよいだろう。

つまるところ、ペレルマンのあげているいくつかの例は、技術的な背景や消費者の好みの変化など、純経済的ではない理由によって、適者が変化するということを意味しているに過ぎない。それは、ペレルマンの考えるように、適者が生存できるとは限らない例というよりも、条件次第で適者が入れ替わるという例であろう。

歴史に現われる適者、ないしは実際に現われる適者は、純経済的な適者とイコールである必要はないのだから、ペレルマンの議論には最初から無理がある。また、ペレルマンの主張するように、適者が生存するとは限らないのだとしても、そのこと自体が競争の胚胎する欠陥であるとはとうて

い言えない。

ともあれ、ペレルマン自身は、競争は万能ではなく、過度の競争は害をもたらす、という方向へ議論を進める。彼によるなら、理論は、経済が容易に均衡するとみなすけれども、歴史は、経済がカタストロフィーの頻発であることを示している。ペレルマンの見るところでは、景気の後退や不況は、経済システムの例外的現象ではなく、「資本主義システムの核心に横たわる」<sup>39)</sup>ものなのだ。生物学の世界では、外的な諸力がカタストロフィーを引き起こすのに対して、経済の世界では、「競争自体がカタストロフィーを引き起こすのである。」<sup>40)</sup>

要するに、ペレルマンの主張するところ、競争は、往々にしてゆき過ぎてしまうものなのであり、それは、市場システムの安定に寄与せず、かえって、市場システムを不安定に落とし入れるものなのである。

### 第3節 不安定性の制御

#### 1

競争が往々にしてゆき過ぎてしまうとするなら、そして、そのゆき過ぎが市場システムの不安定性の原因であるとするなら、競争の制御が当然必要となる。ペレルマンは、この制御のために、賃銀を高めを保つことを推奨する。

ペレルマンは、高賃銀は生産性の向上にも役立つと言う。「高賃銀は、労働を節約する、資本集約的な方法の発見に、企業が専念するよう誘導する。そういう技術は、生産性向上の推進力となる」<sup>41)</sup>と言うのだ。

ペレルマンはまた、高賃銀は、労働者のロイヤリティーの維持にも役立つと言う。「高く支払われる労働者は、彼らが公正に取り扱われていると感じ、彼らの創造性を生産過程の改善にいっそう用いることだろう。反対

に、彼らが不当に搾取されているとみなす労働者は、しばしば、生産過程を破壊する方向で役割を演ずる<sup>42)</sup>』と言うのである。

ともあれ、高賃銀がもたらす、そうした生産性の向上やロイヤリティーの維持は、言わば副産物であろう。ペレルマンの議論の本筋は、あくまで不安定性の制御装置としての、高賃銀ということになる。

## 2

ペレルマンは、不安定性の制御のための高賃銀という、ここでの論点との関わりで、再び、ケインズ、シュムペーター、ポランニーの3人について言及する。

ペレルマンの考える不安定性の制御は、価格の安定とほぼ同義とみなしてよい。そうした価格の安定のために、価格コントロールの対象となる商品は、種々でありうる。にもかかわらず、ペレルマンは、価格コントロールの一種の切り札として、高賃銀を薦めるのである。彼は、この点を、ケインズの主張と関連付けている。

ペレルマンは言う。「ケインズ以前の経済学者は、労働を、市場に売りに出されている他の商品と、何ら変わるところがないものであるかのように、取り扱った。もし、労働者たちが労働を供給し過ぎたら、労働の供給と需要とが等しくなるまで、賃銀が低下するだろうという。結果として、労働市場は、どんな種類の束縛もなしに、常に均衡に向かって運動することになる。保守的な経済学者は、大不況の深刻さが、均衡水準まで賃銀が低下するのを妨害する、労働者組織の力能のせいだとすら、示唆したのである。」<sup>43)</sup>

ペレルマンの言では、ケインズは、こういう経済学の伝統に、反旗をひるがえした。ケインズによれば、賃銀は弾力性に欠け、そのためにこそ、価格の変動にも制約がかかるのだ。こうして、ペレルマンは、次のように

「市場に本来的な不安定性」とは？—マイケル・ペレルマンの所説に寄せて—

述べる。「したがって、賃銀における安定性が、価格における慣性を作り出し、この慣性が、将来についての計算を容易にする。このような慣性がなければ、経済は、コントロールを失ってしまう。実際、野放しの市場の諸力は、エコノミストがしばしば激しいインフレーションに属するとみなす、そうした種類の価格の不安定性を引き起こすのである。／ケインズは、粘着的な賃銀が、価格の錨として作用することによって、安定性をもたらすと信じた。」<sup>44</sup>

このように、ペレルマンは、価格の運動の言わば自然的な制限として、賃銀の非弾力的な性格を受け止め、この賃銀の性格を生かすことによって、市場を、競争まかせの不安定性から、救うことを提案するのである。彼の文脈では、高めに保持された賃銀は、競争の暴走を防止する錨であり、価格の動揺を静める慣性なのである。

こうした議論との関係で、シュムペーターにも言及がなされる。ペレルマンによると、シュムペーターもまた、自由放任には制限が加わるべき場合があることを、認識していた。シュムペーターの言では、拡大の長期的過程の中では、制限がしばしば、不可避免的な事柄になる。ペレルマンは、ブレーキがあるから自動車は速く走れるのだ、という趣旨の、シュムペーターの言葉を紹介している。このブレーキが、ペレルマンの主張の場合、高賃銀を意味することになるわけである。

ポランニーについては、次のように言われる——。経済の安定性を主張する理論は、フィード・バックのメカニズムに依拠している。たとえば、自動車の需要が増大すれば、自動車メーカーは供給を増やそうとするが、コストの上昇が伴うと、価格が高騰し、消費者は自動車の購入を控えることになる。「ポランニーは、擬制的な商品（土地、労働、貨幣）が、通常の商品のように生産されないことを、理解していた。その結果、安定性のために必要なフィード・バックのメカニズムが、欠けているのだ。」<sup>45</sup>

ペレルマンの主張に即して言えば、こうした擬制的な商品には、錨や慣

性による変動の抑制が必要なのであり、とりわけ、労働についてそうなのだ、ということになる。

### 3

このように、ペレルマンは、高賃銀という変動の抑制装置によらねば、市場は安定しないことを強調する。とは言え、彼は、変動の抑制がゆき過ぎてはならないと、慎重に付け加えてもいる。

ペレルマンは言う。「たとえば、第二次世界大戦以後、合衆国の大企業は、マーケット・パワーと保護主義の組み合わせに訴え、時代遅れの工場や装置を保持することができた。その間に、ヨーロッパや日本は、より近代的なテクノロジーを発展させていた。〔合衆国の大企業の〕こうした戦略は、少なくとも短期的には、かなりの程度の安定性の享受を許したが、結局のところ、これらの企業を、1970年代から1980年代にかけての輸入による競争ショック<sup>46)</sup>に対して、脆弱なままにしたのである。」

つまり、過度の競争ではなく、適度の競争が必要であり、過度の不安定性ではなく、適度の不安定性が必要だ、というのである。

ペレルマンは、自らの主張の眼目である、高賃銀についても、それがゆき過ぎてはならない旨、付け加えている。彼は、特に、高賃銀が環境問題を複雑にする可能性について、注意を促している。高賃銀の結果として生ずる裕福な層は、環境に高い価値を見出しつつ、大量消費によって、環境への負荷を増大させるからである。「高賃銀は、環境に両義的な効果を及ぼす可能性<sup>47)</sup>がある」ということになるわけである。

## むすびにかえて

ペレルマンは、著作の結末部分で、次のように述べている。「われわれは、危険をかえりみないで、経済にささやかな保護をもたらす諸力を除去するという、経済の実験、とてつもない冒険を敢行しているのだ。言うまでもなく、国際貿易政策の議論で使われる言葉としての『保護主義』は、良くない響きを持っている。／〔……〕より広い意味で（賃銀を上昇させ、あるいは、環境を保護する）保護主義に似た、別種の方策を打ち立てながら前進していくべきなのだ。」<sup>48)</sup>

ここからも見て取れるように、ペレルマンの立場は、放任主義に反対する、一種の保護主義、管理主義である。それは、一面では、アメリカにおける放任主義、あるいは自由主義、効率主義の台頭への、反発であろう。そして、それは同時に、ケインズに代表されるような、放任主義に反対する、経済学のもうひとつの伝統の復活でもある。

その意味で、ペレルマンの主張には、ある種の納得を引き出させるものがある。市場に安定性をもたらすものとして期待されている高賃銀にしても、放任主義的な資本主義経済で往々にして被害者となる、労働者たちの身になった主張という点では、賛成したくなる要素を持っている。

しかし、ペレルマンの主張を全体として振り返って見ると、もろ手を上げて賛成というわけにはいかない点が、残るのである。

ペレルマンは、資本主義のはらむ困難を、不安定性という一点で把握しようとしているように見える。確かに、恐慌や失業を出来するような不安定性は、資本主義にとって、容易ならざる困難である。しかし、資本主義のはらむ困難を、そうした面だけで把握し切れるのであろうか。たとえば、資本主義の下で、人類が長年にわたって培ってきた、貴重な文化のいくつかは、危機に陥っていないだろうか。モラルやヒューマニティーは、危機に瀕していないか。

そこまで飛躍しないとしても、ペレルマンのように、資本主義から不安定性だけを切り離して議論することが可能かどうか、そも問題であろう。資本主義の不安定性は、その他もろもろの資本主義的要素と結び付きつつ、自らを貫くものではないだろうか。もろもろの資本主義的要素と不安定性とは言わば一体なのであり、不安定性が資本主義の本質なのではないか。だとすれば、資本主義をそのままに、不安定性だけを押さえ込もうとしても、無理があることになる。

そのことと関連するが、ペレルマンの推奨する高賃銀も、高賃銀単独のものとして、意味を持つかどうか、問題である。高賃銀さえ実現されれば、資本主義は安定し、うまくいくと楽観していいのか。あるいは、その他もろもろを放置しておいて、高賃銀だけ実現するということが、可能なのかどうか。

ともあれ、ペレルマンの所説のような議論が、放任主義の本場と目されるアメリカで行なわれていることは、興味深い。それは、資本主義というものが、あるいは市場経済というものが、よく言われるのとは異なり、自然的な合理性に裏打ちされたシステムではないこと。放任主義一辺倒では、決して立ち行かないこと。これらを、如実に示しているように見えるからである。

註

- 1) Michael Perelman, *The Natural Instability of Markets; Expectations, Increasing Returns, and the Collapse of Capitalism*, (Macmillan 1999).
- 2) *Ibid.*, p.ix.
- 3) *Ibid.*
- 4) *Ibid.*
- 5) *Ibid.*, p.x.
- 6) *Ibid.*
- 7) *Ibid.*, p.2.
- 8) *Ibid.*
- 9) *Ibid.*
- 10) *Ibid.*, p.7.
- 11) *Ibid.*, p.10.
- 12) *Ibid.*, p.13.
- 13) *Ibid.*, p.27.
- 14) *Ibid.*, p.41.
- 15) *Ibid.*
- 16) *Ibid.*, p.42.
- 17) *Ibid.*
- 18) *Ibid.*, p.47-48.
- 19) *Ibid.*, p.48.
- 20) *Ibid.*
- 21) *Ibid.*, p.50.
- 22) *Ibid.*
- 23) *Ibid.*, p.51.
- 24) *Ibid.*, p.52.
- 25) *Ibid.*
- 26) *Ibid.*
- 27) *Ibid.*
- 28) *Ibid.*, p.53.
- 29) *Ibid.*
- 30) *Ibid.*, p.59.
- 31) *Ibid.*
- 32) *Ibid.*
- 33) *Ibid.*, p.60.
- 34) *Ibid.*, p.61.
- 35) *Ibid.*, p.70.
- 36) *Ibid.*, p.71.

- 37) *Ibid.*, p.73.
- 38) *Ibid.*, p.84.
- 39) *Ibid.*, p.85.
- 40) *Ibid.*, p.85-86.
- 41) *Ibid.*, p.120.
- 42) *Ibid.*, p.122.
- 43) *Ibid.*, p.138.
- 44) *Ibid.*, p.138-139.
- 45) *Ibid.*, p.156.
- 46) *Ibid.*, p.141.
- 47) *Ibid.*, p.164.
- 48) *Ibid.*, p.165.